

## フィヒテ『全知識学の基礎』における「障害 Anstoß」概念の再検討

自我の理論的自己規定への課題の契機として

尾崎 賛美(早稲田大学)

本発表は、イェナ期のヨハン・ゴットリープ・フィヒテ(1762-1814)の主要テキスト、『全知識学の基礎』(1794/95、以下『基礎』と略記)における「障害 Anstoß」概念の考察である。この「障害」概念は、Eidam が評するよう、その概念の解釈を試みる者にとって、興味をかき立てる Anregung のものであると同時に悩みの種 Ärgernis でもある(Eidam: S. 191)。『基礎』の理論的な知の可能性の根拠が探求される文脈において、この「障害」は、我々人間に対して表象がいかに生起するのか、ということについての説明のために想定される概念であるが(GA I/ 2, 361)、その内実は実に様々な仕方で解釈されてきた(cf. Breazeale: 156ff.)。そこで本発表は、この「障害」概念が「自我 das Ich」に対し、「自己自身を限局すべし」という課題をもたらす契機として導入される点に焦点を当て、当概念の意義を、自我の理論的自己規定との連関から改めて検討することを目標とする。

件の「障害」概念は、自我という人間の主観的な意識に対し、どのようにして当の主観から区別される客観的なものが現れるのか、あるいはこうした主観的な意識がいかにして、自我ならざるもの(非我 das Nicht-Ich)との連関において規定され得るのか論じられるに際し引き合いに出される。他方、この「障害」は、自らを制限なく定立するという自我の理念の下で、無限へと進みゆく自我の能動性が存するところのみ、この能動性に抵抗するかたちで生じるとされる。こうした論旨は、ともすると自我の外部に、自我から独立して自体的に存在する非我を、さらに言えば、フィヒテの思想の内に独断的実在論的な主張を予想させ、実際に、フィヒテにおける「障害」ないし、障害するものとして想定される非我を「物自体 Ding an sich」に類する概念として解釈する立場もあったが(vgl. Soller: S. 181f.)、フィヒテに則すならばこうした解釈は棄却されざるを得ない(vgl. GA I/ 2, 354f.)。しかしながら、このように自我の能動性に対して生じる抵抗的な側面と、自我の外部には想定され得ない側面との、一見相容れない二側面をあわせもつ点に、この「障害」概念の解釈が一筋縄ではいかない難しさがあるのもまた事実である。

他方、たとえば先述の Breazeale や Klotz, Förster など、「障害」概念を物自体的な解釈から切り離して論じる立場もある。Klotz は、対象と連関するところの、自我それのみからでは説明できないような自我の活動の規定性のための条件として「障害」概念を解釈しており(Klotz, p. 78)、Förster は自我が自らを有限なものとして意識するための契機として「障害」概念を論じている(Förster, 203)。また〈Anstoß〉という概念が本来そなえる二義性に着目した Breazeale は、一方で自我の実践的能力としての自由なる活動性に対する〈妨げ〉ないし〈妨害〉(Hindernis, Hemmung)としての側面と、他方でこうした妨害に基づいて生じる制限性の原因として非我を定立すべく、自我を理論的活動へと向かわせる〈契機〉ないし〈刺激〉(Anlass, Impuls)としての側面という二側面からこの「障害」概念を解釈する(Breazeale: 160)。

このように「障害」概念の内実については、すでに一定の解釈が提示されているが、フィヒテが「障害」概念を導出するにあたって示した点、すなわち、「障害は、自我を能動的に限局するわけではなく、自我に対し、自己自身を限局せよ」という課題 Aufgabe をもたらすであろう(GA I/ 2, 355)という記述そのものの検討については、主題的に取り上げられていない。たしかに、すでにいくつかの研究において、「障害」概念が自我のいかなる種の能動性に対し、どのような仕方で連関するのかという点については明らかにされている側面もあるが、そもそもなぜ「障害」が自我に対し「自己限局せよ」という課題を与えるものとして想定されているの

かという点については、いまだ明確な解釈が与えられているわけではない。もちろん「障害」は、上述の通り、いかにして表象が可能となるのか説明されるために導入された概念である。自我の能動性に対して「障害」が生じ、こうした「障害」の生起を条件として、自我は自己自身を限局し規定する。さらにこうした自己規定を通じて、自我の内に主観的なものと客観的なものが相反立しつつも、相互に滅却し合わないかたちで保持される(総合的に合一される)。このような諸契機を経て、自我が自らを、自己ならざるものによって限局するということが、このことに基づきまた、自我が自らを規定されたものとして反省するということの可能性が説明される(GA I/ 2, 361)。こうした行論は、『基礎』の全体的な視座からすれば、「理論的知識学全体の頂点に位置する」とされる命題、すなわち「自我は自らを、非我によって規定されたものとして定立する」という命題の究明に向けられているということもまた確かである(ebd.)。しかし、それでもなお検討されるべきは、なぜフィヒテは自我の自己限局を、「課題」という概念のもとで論じる必要があったのかという点であり、あるいはなぜ自我は(理論的な意味において)自己自身を限局すべしという課題のもとで、自己限局を遂行しなければならないと想定されているのかという点である。こうした問題関心に基づき本発表は、『基礎』における「障害」概念について、それが課題としてもたらす自我の自己限局および理論的な自己規定との連関から検討を行う。

### 【参考文献】

- Eidam, Heinz (1997), „Fichtes Anstoß, Anmerkung zu einem Begriff der Wissenschaftslehre von 1794“.
- Breazeale, Daniel (2013), *Thinking Trough the Wissenschaftslehre*.
- Förster, Eckart (2018), *Die 25 Jahre der Philosophie* (3., verbesserte Auflage).
- Klotz, Christian (2016), “Fichte’s Explanation of the Dynamic Structure of Consciousness in the 1794–95 Wissenschaftslehre”.
- Soller, K. Alois (1997), „Fichtes Lehre vom Anstoß, Nicht-Ich und Ding an sich in der GWL: Eine kritische Erörterung“.